

日蓮大聖人御書全集

しゅじょうしんしんごしよ

衆生身心御書

新版
2040
ゝ
2047

衆生身心御書

けんじき

建治期

しゅじょう しんしん

説

たも

しゅじょう

こころ

望

衆生の身心をとかせ給う。その衆生の心にのぞむとて

説

たま

ひと せつ

しゅじょう

こころ

出

とかせ給えば、人の説なれども、衆生の心をいはず。か

故

ずいたい

きよう

名

たと

酒

好

るがゆえに、随他意の経となづけたり。譬えば、さけもこの

親

極

酒

好

愛

こ

まぬおやの、きわめてさけをこのむいとおしき子あり。か

愛

こころ

取

彼

酒

つはいとおしみ、かつは心をとらんがために、かれにさけ

勸

ふぼ

さけ

好

由

をすすめんがために、父母も酒をこのむよしをするなり。

菓

無

こ

ふぼ

さけ

好

たも

思

しかるを、はかなき子は、父母も酒をこのみ給うとおもえ

り。

だいいきよう

もう

きよう

にんてん

説

あごんきよう

もう

提謂経と申す経は、人天のことをとけり。阿含経と申す

きよう

にじよう

説

たも

けごんきよう

もう

きよう

ぼさつ

経は、二乗のことをとかせ給う。華嚴経と申す経は、菩薩

ほうどう

ねはんきようとう

あごんきよう

だいいきよう

のとなり。方等・般若経等は、あるいは阿含経・提謂経に

似

けごんきよう

似

きようきよう

にたり。あるいは華嚴経にもにたり。これらの経々は、

まつだい

ぼんぷ

読

そうら

ほとけ

みこころ

かな

末代の凡夫これをよみ候えば仏の御心に叶うらんとは

ぎようじや

思

詳

論

おのれ

こころ

行者はおもえども、くわしくこれをろんずれば、己が心

読

おのれ

こころ

もと

拙

こころ

をよむなり。己が心は本よりつたなき心なれば、はかば

かしきことなし。

ほけきよう もう

ずいじい もう

ほとけ みこころ

説 たも

法華經と申すは、随自意と申して、仏の御心をとかせ給

ほとけ みこころ 善 こころ

う。仏の御心はよき心なるゆえに、たといしらざる人も、

きよう 読 りやく 量

この經をよみたてまつれば利益はかりなし。麻の中の

蓬 筒 なか 蛇 善 ひと 睦 者

よもぎ、つつの中のくちなわ、よき人にむつぶもの、なに

こころ 振 舞 ことば 直

となけれども心もふるまいも言もなおしくなるなり。

ほけきよう 何 きよう しん

法華經もかくのごとし。なにとなけれどもこの經を信じぬ

ひと ほとけ 善 思

る人をば、仏のよきものとおぼすなり。

ほけきよう き とき くに

この法華經において、また機により時により国により

弘 ひと 様 々 変 そうろう とうかく

ひろむる人により、ようようにかわりて候をば、等覺の

ぼさつ

間

知

たま

見

そうろう

菩薩までもこのあわいをばしらせ給わずとみえて候。ま

まつだい

ぼんぷ

計

果

そうろう

して末代の凡夫は、いかでかはからいおおせ候べき。

ひと

使

さんにん

ひとり

極

しかれども、人のつかいに三人あり。一人はきわめて

小賢

ひとり

果無

小賢

こざかしき。一人ははかなくもなし、またこざかしからず。

ひとり

極

果無

確

さんにん

だいいち

一人はきわめてはかなく、たしかなる。この三人に、第一は

過

だいに

だいいち

あやまちなし。第二は、第一はどこそなければども、すこし

小賢

しゅ

おん言

葉

わたくし

ことば

添

こざかしきゆえに主の御ことばに私の言をそうるゆえ

だいいち

悪

使

だいさん

果

無

に、第一のわるきつかいとなる。第三は、きわめてはかなく

わたくし

ことば

雑

しょうじき

あるゆえに私の言をまじえず、きわめて正直なるゆえ

しゆ ことば 違

だいに

そうろう

に主の言をたがえず。第二よりもよきことにて候。あや

だいいち

勝

そうろう

だいいち

がっし

しえ

まつて第一にもすぐれて候なり。第一をば月支の四依に

譬

だいに

かんど

にんし

だいさん

まつだい

ぼんぷ

たとう。第二をば漢土の人師にたとう。第三をば末代の凡夫

なか

ぐち

しょうじき

の中に愚癡にして正直なるものにたとう。

ほとけざいせ

置

ほとけ

ごにゆうめつ

つぎ

ひ

仏在世はしばらくこれをおく。仏の御入滅の次の日よ

いっせんねん

しょうほう

もう

しょうほういっせんねん

ふた

分

り一千年をば正法と申す。この正法一千年を二つにわか

さき

ごひやくねん

あいだ

しょうじようきよう

広

たも

広

つ。前の五百年が間は小乗経ひろまらせ給う。ひろめ

ひとびと

かしよう

あなんとう

のち

ごひやくねん

めみよう

りゆじゆ

し人々は迦葉・阿難等なり。後の五百年は、馬鳴・竜樹・

むじやく

てんじんとう

ごんだいじようきよう

ぐつう

たも

ほけきよう

無著・天親等、権大乘経を弘通せさせ給う。法華経をば

片 端

書

ろんじ

もう

出

かたはしばかりかける論師もあり、またつやつや申しいだ

ひと

しょうほういつせんねん

のち

ろんじ

なか

しょうぶん

さぬ人もあり。正法一千年より後の論師の中には、少分は

ぶつせつ

似

たぶん

誤

仏説ににたれども、多分をあやまりあり。あやまりなくし

足

かしよう

あなん

めみよう

りゆうじゆ

むじやく

てんじん

てしかもたらざるは、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親

とう

等なり。

どうほう

い

いつせんねん

かんど

ぶつぼう

渡

はじ

像法に入つて一千年、漢土に仏法わたりしかば、始めは

じゆか

そうろう

暇

故

ぶつきよう

うち

儒家と相論せしゆえにいとまなきかのゆえに、仏教の内の

だいしよう

ごんじつ

さた

漸

ぶつぼうる

ふ

うえ

がつし

大小・権実の沙汰なし。ようやく仏法流布せし上、月支よ

重

重

ぶつぼう

渡

きた

さき

ひとびと

賢

りかさねがさね仏法わたり来るほどに、前の人々はかしこ

きようなれども、のち 渡 きようろん 後にわたる経論をもつてみれば、見 果 無 はかな

しゅつたい

きことも出来す。また、思 はかなくおもいし人々もかしこく

見

みゆることもありき。けつく じゅうりゆう 結句は十流になりて千万の義あり

ぐしや

付

見

ちしや

思

しかば、愚者はいずれにつくべしともみえず。智者とおぼし

ひと

へんしゅう 限

さいごく

いちどう

ぎ

き人は辺執かぎりなし。しかれども、最極は一同の義あり。

いちだいいいち

けこんきよう

だいに

ねはんぎよう

だいさん

ほけきよう

いわゆる、一代第一は華嚴経、第二は涅槃経、第三は法華経。

ぎ

かみいちにん

しもばんみん

いぎ

だいしよう

この義は、上一人より下万民にいたるまで異義なし。大聖

仰

ほううんほつし

ちぞうほつしとう

じつし

ぎ いちどう

とあおぎし法雲法師・智蔵法師等の十師の義一同なりしゆ

えなり。

しかるを、どうほう なか ちん ずい よ ちぎ もう しょうどう像法の中の陳・隋の代に、智顗と申す小僧あ

のち

ちしやだいし

号

ほうもんおお

せん

り。後には智者大師とごうす。法門多しといえども、詮ず

ほつけ

ねはん

けこんぎよう

しょうれつ

ひと

るところ、法華・涅槃・華嚴經の勝劣の一つばかりなり。

ちぎほつしい

ぶつぼう

逆

うんぬん

ちんしゆ

智顗法師云わく「仏法さかさまなり」云々。陳主このこと

糾

なんぼくじつし

さいちよう

えごうそうじよう

えこ

をたださんがために、南北十師の最頂たる慧暉僧正・慧曠

そうず えよう

はつさいほつしとう

ひやくうよにん

め

あ

とき

僧都・慧栄・法歳法師等の百有余人を召し合わせられし時、

ほけきよう

なか

しよきよう

なか

もつと

かみ

あ

「法華經の中には、『諸經の中において最もその上に在り』

とううんぬん

い

いこんとう

せつ

もつと

なんしんなんげ

等云々。また云わく『已今当の説に最もこれ難信難解なり』

とううんぬん

い

むりようぎきよう

い

まかはんにや

けこんかいこう

とう

等云々。已とは無量義經に云わく『摩訶般若・華嚴海空』等

うんぬん とう

ねはんぎよう

い

はんにや波羅みつ

だいねはん

い

云々。当とは涅槃經に云わく『般若はら蜜より大涅槃を出だ

とううんぬん

きようもん

けこんぎよう

ねはんぎよう

ほけきようすぐ

す』等云々。この經文は、華嚴經・涅槃經には法華經勝る

み

かつかく

めいめい

ごえつう

責

と見ゆること、赫々たり、明々たり。御会通あるべし」とせ

くち

閉

あつく

吐

めしかば、あるいは口をとじ、あるいは悪口をはき、ある

いろ

変

ちんしゆた

さんぱい

いは色をへんじなんどせしかども、陳主立つて三拝し、

ひやつかんだなごころ

合

ちからおよ

負

百官 掌 をあわせしかば、力及ばずまけにき。

いちだい

なか

だいいちほけきよう

ぞうほう

のち

一代の中には第一法華經にてありしほどに、像法の後の

ごひやく

しんやく

きようろんかさ

渡

たいそうこうてい

じようがんさんねん

五百に新訳の經論重ねてわたる。太宗皇帝の貞觀三年に

げんじよう

もう

ひと

がっし

い

じゅうしちねん

ごてん

ぶつぼう

なら

玄奘と申す人あり。月支に入つて十七年、五天の仏法を習

極

じようがんじゆうくねん

かんど

渡

じんみつきよう

いきわめて貞観十九年に漢土へわたりしが、深密經・

けがろん

ゆいしきろん

ほつそうしゆう

げんじようい

がっし

瑜伽論・唯識論・法相宗をわたす。玄奘云わく「月支に

しゆうじゆうおお

しゆうだいいち

たいそうこうてい

宗々多しといえども、この宗第一なり」。太宗皇帝はま

かんどだいいち

けんおう

げんじよう

し

しゆう

しよせん

い

た漢土第一の賢王なり。玄奘を師とす。この宗の所詮に云

さんじようほうべん

いちじようしんじつ

いちじようほうべん

わく「あるいは三乗方便・一乗真実。あるいは一乗方便・

さんじようしんじつ

い

ごしyouかくべつ

けつじようしyou

むしyou

三乗真実」。また云わく「五性各別なり。決定性と無性の

うじyou

なが

ほとけ

な

とううんぬん

ぎ

てんだいしyou

すいか

有情は永く仏に成らず」等云々。この義は天台宗と水火な

てんだいだいし

しyouあんだいし

ごにyouめつ

いげ

り。しかも天台大師と章安大師は御入滅なりぬ。その已下

ひとびと

にんびにん

てんだいしyouやぶ

見

の人々は人非人なり。すでに天台宗破れてみえしなり。

のち そくてんこうごう みよ けこんしゅうた さき てんだいだいし 責

その後、則天皇后の御世に華嚴宗立つ。前に天台大師にせ

ろくじつかん けこんぎよう 差 置 のち にっしやうさんぞう

められし六十卷の華嚴經をばさしおきて、後に日照三蔵の

渡 しんやく けこんぎようはちじつかん た しゅう

わたせる新訳の華嚴經八十卷をもつて立てたり。この宗の

詮 言 けこんぎよう こんぽんほうりん ほけきよう しまつほうりん とう

せんにいわく「華嚴經は根本法輪、法華經は枝末法輪」等

うんぬん そくてんこうごう あま ないげてん 小 賢 ひと

云々。則天皇后は尼にておわせしが、内外典にござかしき人

まんしん 高 てんだいしゅう 下 思

なり。慢心たかくして、天台宗をさげおぼしてありしなり。

ほつそう けこんしゅう にじゅう ほけきよう 隠 たも

法相といい、華嚴宗といい、二重に法華經かくれさせ給う。

のち げんそうこうてい ぎよう がつし ぜんむいさんぞう こんごうち

その後、玄宗皇帝の御宇に、月支より善無畏三蔵・金剛智

さんぞう ふくうさんぞう だいにちきよう こんごうちようきよう そしつじきよう もう さんきよう

三蔵・不空三蔵、大日經・金剛頂經・蘇悉地經と申す三經

渡

さんにな

ひと

ほうもん

さきさき

をわたす。この三人は、人がらといい、法門といい、前々の

かんど

にんし

たい

ひとびと

さき

無

漢土の人師には対すべくもなき人々なり。しかも前になか

いん

しんごん

渡

ぶつぼう

いぜん

くに

りし印と真言とをわたすゆえに、「仏法は已前にはこの国に

思

ひとびとい

てんだいしゅう

なかりけり」とおぼせしなり。この人々云わく「天台宗は

けごん

ほつそう

さんろん

すぐ

しんごんきよう

華嚴・法相・三論には勝れたり。しかれども、この真言経

およ

うんぬん

のち

みようらくだいし

てんだいだいし

責

には及ばず」と云々。その後、妙楽大師は、天台大師のせ

たま

ほつそうしゅう

けごんしゅう

しんごんしゅう

責

たま

そうら

め給わざる法相宗・華嚴宗・真言宗をせめ給いて候えど

てんだいだいし

こうじよう

たま

やみよ

も、天台大師のごとく公場にてせめ給わざれば、ただ闇夜

錦

ほけきよう

無

いん

しんごん

げんぜん

のにしきのごとし。法華経になき印と真言と現前なるゆえ

に、皆人一同に真言まさりにてありしなり。

ぞうほう なか にほんこく ぶつぼう 渡

きんめいてんのう

像法の中に日本国に仏法わたり、いわゆる欽明天皇の

ろくねん

きんめい

かんむ

にひやくよねん あいだ

六年なり。欽明より桓武にいたるまで二百余年が間は、

さんろん

じようじつ

ほつそう

くしゃ

けごん

りつ

ろくしゆうぐつう

しんごんしゆう

三論・成実・法相・俱舎・華嚴・律の六宗弘通せり。真言宗

にんのうしじゆうしだいげんしようにてんのう

ぎよう

てんだいしゆう

にんのう

は人王四十四代元正天皇の御宇にわたる。天台宗は人王

だいしじゆうごだいしようにてんのう

ぎよう

広

第四十五代聖武天皇の御宇にわたる。しかれども、ひろま

ることなし。

かんむ

みよ

さいちようほつし

のち

でんぎようだいし

号

につとう

桓武の御代に最澄法師、後には伝教大師とごうす。入唐

いぜん

ろくしゆう

なら

極

うえ

じゆうごねん

あいだ

てんだい

しんごん

已前に六宗を習いきわむる上、十五年が間、天台・真言の

にしゅう やま 籠 居 ごらん につとう いぜん てんだいしゅう

二宗を山にこもりいて御覧ありき。入唐已前に天台宗をも

ろくしゅう 責 しちだいじみな責 さいちよう でし

つて六宗をせめしかば、七大寺皆せめられて最澄の弟子

ろくしゅう ぎ 破 のち えんりやくにじゅうさんねん ごにつとう

となりぬ。六宗の義やぶれぬ。後、延暦二十三年に御入唐、

どうにじゅうしねんごきちよう てんだい しんごん しゅう にほんこく 弘

同二十四年御帰朝。天台・真言の宗を日本国にひろめたり。

しょうれつ ないしん そんな ひと む 説

ただし、勝劣のことは内心にこれを存して人に向かつてと

かざるか。

おな よ こうかい ひと のち こうぼうだいし 号

同じき代に空海という人あり。後には弘法大師とごうす。

えんりやくにじゅうさんねん ごにつとう だいどうさんねんごきちよう しんごん いっしゅう

延暦二十三年に御入唐、大同三年御帰朝。ただ真言の一宗

なら 渡 ひと ぎ い ほけきよう けごんぎよう

を習いわたす。この人の義に云わく「法華経はなお華嚴経に

およ

しんごん

及ばず。いかにいわんや真言においてをや」。

でんぎようだいし

みでし

えんにん

ひと

のち

じかくかくだいし

伝教大師の御弟子に円仁という人あり。後に慈覚大師

号

い

じようわごねん

ごにつとう

どうじゆうしねん

ごきちよう

とごうす。去ぬる承和五年の御入唐、同十四年に御帰朝。

じゆうねん

あいだ

しんごん

てんだい

にしゆう

学

にほんこく

でんぎよう

十年が間、真言・天台の二宗をがくす。日本国にて伝教

だいし

ぎしん

えんちよう

てんだい

しんごん

にしゆう

なら

極

うえ

大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわめたる上、

かんど

渡

じゆうねん

あいだ

はつか

だいとく

値

しんごん

なら

漢土にわたりて十年が間、八箇の大徳にあいて真言を習

しゆうえい

しおんとう

あ

たま

てんだいしゆう

なら

にほん

きちよう

い、宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う。日本に帰朝

い

てんだいしゆう

しんごんしゆう

おな

だいご

して云わく「天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり。とも

じんぴ

とううんぬん

せんじ

もう

添

に深秘なり」等云々。宣旨を申してこれにそう。

のち

えんちん

もう

ひと

のち

ちしようだいし

号

その後、円珍と申す人あり。後には智証大師とごうす。

にっとう いぜん

ぎしんかしよう

みでし

にほんこく

ぎしん

入唐已前には義真和尚の御弟子なり。日本国にして義真・

えんちよう

えんにんとう

ひとびと

てんだい

しんごん

にしゅう

なら

極

円澄・円仁等の人々に天台・真言の二宗を習いきわめたり。

うえ

い

にんじゆさんねん

ごにっとう

じようがんがんねん

ごきちよう

しちねん

その上、去ぬる仁寿三年に御入唐、貞観元年に御帰朝。七年

あいだ

てんだい

しんごん

にしゅう

はっせん

りようしよう

ひとびと

なら

が間、天台・真言の二宗を法全・良諲等の人々に習いき

てんだい

しんごん

にしゅう

しようれつ

かがみ

懸

こうだい

わむ。天台・真言の二宗の勝劣、鏡をかけたり。「後代に

いちじよう

争

さだ

い

てんだい

しんごん

一定あらそいありなん、定むべし」と云つて、「天台・真言

にしゅう

たと

ひと

りよう

め

とり

ふた

つばさ

の二宗は、譬えば、人の両の目、鳥の二つの翼のごとし、

ほか

いぎ

そん

ひとびと

そし

でんぎようだいし

背

この外、異義を存せん人々をば「祖師・伝教大師にそむく

ひと

やま す

せんじ

もう

添

ぐつう

人なり。山に住むべからず」と宣旨を申しそえて弘通せさ

たま

かんど

にほん

ちしやおお

せ給いき。されば、漢土・日本に智者多しというとも、こ

ぎ

破

ひと

ぎ

真

なら

の義をやぶる人はあるべからず。この義まことならば、習う

ひとびと

かなら

ほとけ

成

たま

崇

たも

こくおう

人々は必ず仏にならせ給いぬらん。あがめさせ給う国王

とう

かなら

よあんのん

覚

等は、必ず世安穩にありぬらんとおぼゆ。

よ

ぐあん

ひと

もう

おん

用

ただし、予が愚案は、人に申すとも、御もちいあるべか

うえ

み

怨

聞

たも

でしだんな

らざる上、身のあだとなるべし。またきかせ給う弟子檀那も

あんのん

思

うえ

ぎ

違

安穩なるべからずとおもいし上、その義またたがわず。た

いちじようぶつ い

かな

覚

だし、このことは一定仏意には叶わでもやあるらんとおぼ

そうろう

ほけきよういちぶはつかんにじゅうはつぽん

きよう

すぐ

え候。法華經一部八卷二十八品には、この經に勝れたる

きよう

ほけきよう

じつぼう

ほとけ

集

だいもうご

經おわせば、この法華經は十方の仏あつまりて大妄語を

たま

けごん

ねはん

はんにな

あつめさせ給えるなるべし。したがって、華嚴・涅槃・般若・

だいにちきよう

じんみつとう

きようぎよう

み

しよきよう

なか

もつと

大日經・深密等の經々を見るに、「諸經の中において最

かみ

あ

みようもん

破

もん

もその上に在り」の明文をやぶりたる文なし。

ぜんむいとう

げんじようとう

こうぼう

じかく

ちしようとう

したがって、善無畏等、玄奘等、弘法・慈覚・智証等、

しゅじゅ

巧

ほけきよう

だいにちきよう

たい

破

種々のたくみあれども、法華經を大日經に對してやぶりと

きようもん

出

たま

いん

しんごん

うむ

故

る經文はいだし給わず。ただ印・真言ばかりの有無をゆえ

すうひやつかん

文

造

かんど

にほん

おうふく

とせるなるべし。数百卷のふみをつくり、漢土・日本に往復

むじん

謀

せんじ

もう

添

ひと

脅

して無尽のたばかりをなし、
宣旨を申しそえて人をおどさ

きようもんふんみよう

誰

うたが

れんよりは、
経文分明ならばたれか疑いをなすべき。

露 積

かわ

かわ

たいかい

ちり

つゆつもりて河となる、
河つもりて大海となる、
塵つも

やま

やま 重

しゅみせん

しょうじ 積

りて山となる、
山かさなりて須弥山となれり。
小事つも

だいじ

もつと

だいじ

て大事となる。
いかにいわんや、
このことは最も大事なり。

しよ 造

りようほう

どうり

もんしょう

尽

疏をつくられけるにも、
両方の道理・文証をつくさるべ

せんじ

りようほう

たず

きわ

ふんみよう

しょうもん

かりけるか。
また宣旨も、
両方を尋ね極めて、
分明の証文

書 載

戒

をかきのせていましめあるべかりけるか。

い こんとう

きようもん

ほとけ

破

「已今当」の経文は、
仏すらやぶりがたし。
いかにい

ろんじ にんし こくおう いとく

破

わんや、論師・人師・国王の威徳をもつてやぶるべしや。「已

こんとう

きようもん

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してんとう

ちようもん

今当」の経文をば、梵王・帝釈・日月・四天等、聴聞し

おのおの

くでん

書

留

いこん

て各々の宮殿にかきとどめておわするなり。まことに「已今

とう

きようもん

し

ひと

あ

とき

さき

ひとびと

じゃぎ

広

当」の経文を知らぬ人の有る時は先の人々の邪義はひろま

とが

きようもん

強

た

りて失なきようにてはありとも、この経文をつよく立てて

たいてん

強

しゅつたい

だいじしゅつたい

卑

退転せざるこわもの出来しなば、大事出来すべし。いやし

罵

う

流

みて、あるいはのり、あるいは打ち、あるいはながし、あ

いのち

断

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してん 起

るいは命をたたんほどに、梵王・帝釈・日月・四天おこ

合

きようじや

方

人

ぞんがい

てん

りあいて、この行者のかとうどをせんほどに、存外に天の

責きた 滅たみ 破くに 破破 ほけきよう ぎようじや

せめ来つて、民もほろび、国もやぶれんか。法華經の行者

卑しゆご 強てん 強強 例れい 修羅しゆら 日にち 月がつ

はいやしけれども、守護する天こわし。例せば、修羅が日月

吞こうべしちぶん 破いぬ 吼しし 腸腸 腐腐

をのめば頭七分にわる、犬が師子をほゆればはらわたくさ

いま よ 見にほんこく 小く 小く

る。今、予みるに、日本国かくのごとし。またこれを供養せ

ひとびと ほけきようくよう くだく だんぎようだいし しゃく い

ん人々は法華經供養の功德あるべし。伝教大師、釈して云

ほ 物もの 福ふく あんみよう っ っ 物もの つみ むけん ひら

わく「讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開

とううんぬん

く」等云々。

稗しやくしづつ 飯くよう ひと ふみようによらい

ひえのはんを辟支仏に供養せし人は普明如来となる。

土 餅 ほとけ 小く 小く えんぶだい おう

つちのもちいを仏に供養せしかば、閻浮提の王となれり。

功

真

くよう

たといこうをいたせども、まことならぬことを供養すれば、

だいあく

ぜん

こころ

疎

少

大悪とはなれども善とならず。たとい、心おろかに、すこ

もの

真

ひと

くよう

功

だい

しきの物なれども、まことの人に供養すればこう大なり。

こころ

ほう

くよう

いかにいわんや、心ざしありて、まことの法を供養せん

ひとびと

人々をや。

うえ

とうせい

よ

乱

たみ

ちから

弱

暇

とき

その上、当世は世みだれて民の力よわし。いとまなき時

こころ

行

さんちゆう

ほけきよう

なれども、心ざしのゆくところ、山中の法華経へ、

孟

宗

筍

送

たも

ふくでん

良

種

お

もうそうがたかななをおくらせ給う。福田によきたねを下

たも

涙

止

ろさせ給うか。なみだもとどまらず。